

『地域の仲間と さあ旅に出ましょう』

愛媛大学法文学部 総合政策学科講師 米田 誠司



熱い地域で生み出される新しい価値

今回の特集では「何を求めて人は地域に来るのか」ということを取り上げています。元気のいい特集記事が6つもありますので、詳しいことは後ほどそちらをご覧ください。まずはそれぞれのポイントを順にみていきましょう。

1つ目は宇和島市御旗地区の取り組みです。愛媛大学と3年間ワークショップを開催し、住民が一緒になって人口予測や将来ビジョンをまとめました。そのことを踏まえて動いてきたことの中から「御旗ふるさと市」や「みまき自然の学校」といった活動につながっており、御旗では土地の魅力と人の魅力が外から人を引き付けると結論づけています。

2つ目のNPO法人玉川サイコーは、法人設立前年の2010年に「こんな玉川知らなかった」というガイドブックを作成しています。これは発行と同時に品切れになったという伝説のガイドブック

で、その勢いは玉川ダムを模したカレーを食器ごと開発するという「玉川ダムカレー」誕生で結実しています。そしてこのメンバーは「地域づくりは楽しく」を合言葉にしています。

3つ目の松山の観光ボランティアガイドの会の、160名からなるメンバーの実践もさることながら、普段からお客様が写真を撮ろうとしたらシャッターを押す、地図を見ていたら声をかける、坊ちゃん列車が走っていたら手を振るなど、なかなか地道なウェルカム体制は充実しています。

4つ目の映画「食堂ゆすかわ」の誕生は、2010年の「遊子川もりあげ隊」から始まる動きですが、映画という一つの作品をつくる過程で遊子川を舞台に地域住民が一丸となって取り組んでいる様子には感動を覚えます。その甲斐あって遊子川のファンが確実に増えており、もともと大事なことはふるさとを愛する地域住民の一致した気持ちだと述べてい

ます。

5つ目は松山大学のNPOミュージズの取り組みです。大学生がいろんな地域に関わりながら実績を残していますが、俳句修学旅行や小中学生対象の農業体験の準備やお世話をする中で、大学生自身が多くのことを学んでいる様子がよくわかります。また砥部町五本松では「村の駅」という接待所を開設し、今後はここを地域の玄関口にしていきたいと意気込んでいます。

6つ目は愛南リポーターズの動きです。住民自身が映像ディレクターとなり、「愛南ワンダーランド」という番組を毎月制作し住民の暮らしぶりを伝えています。そして2013年には「ふるさとCM大賞えひめ」を受賞しています。こうした活動が認められると自信が生まれ、それが主体的な活動へとつながっていくと述べています。

このように駆け足で見えてきただけでも、愛媛の地域は今とても熱く、新しい

価値を生み出しながらいきいきと活動している様子がよく伝わってきます。

何を求めて人は地域に来るのか

そこで今回の特集テーマ「何を求めて人は地域に来るのか」に戻って、ここまで見えてきた6つの事例と引き合わせながら、少しずつ考えていきましょう。



地域の資源はアイディア次第でまだまだ掘り起こせる「アトリエとき」では杉の先端部まで食器にする試みを実践

まず「何を」ということですが、従来の観光目線で考えれば、名所旧跡や観光施設を求めて観光客が来るというのがセオリーでしたが、ご紹介したような交流事業では、埋もれている地域資源を掘り起こすところからまず始まります。「こんな玉川知らなかった」というガイドブックはまさにそうした掘り起しの成果で、またこのネーミングが人の興味を引き付ける優れたものです。一方で愛南

ポーターズが暮らしぶりを毎月番組にしているように、地域それぞれで異なる暮らしぶりこそが地域資源、これからの観光・交流の資源になるのです。余談ですが、私は旅先であの手この手で情報収集して地元ならではのいい居酒屋にたどり着きます。そしてご常連の邪魔をしないようにカウンターに座りますが、地元の人との話から伺い知る暮らしぶりの違いが一番のご馳走だと思っています。

では次に「求めて」ということについて、これは旅人それぞれに事情は異なります。ただよく考えれば、旅に出たいと考えるのは、のどが渇いたから水が飲みたいというのと似ていて、日頃の生活で心が渇くようにすり減らした自分をリチャージしたいという動機が一番多いように思います。ということは、松山の観光ポランティアガイドのみなさんが写真を撮ろうとしたり、地図を見ていたら一声かけるといふことは、求められてすることではないけれども、旅人にとってはこれほど癒され、嬉しいことはありません。またこうした思いがけない出会いやふれあいこそが今あらためて求められているのです。

さて「人」とはどういう人のことをいうのでしょうか。昔ながらの観光形態の中には、一見さんだけを相手にして数をこなして稼ぐという手法もありました

が、やはりここは、御旗のように土地の魅力、人の魅力で人を引きつけ、そしてそれぞれの地域のファンにしていけることが必要でしょう。さらに言えば、金銭価値に置き換えて成立する観光と異なり、交流事業の場合は、人と人の気持ちを通じる、あるいは思いが交換できることも大切ですから、お互いに尊重しながら関係性を紡いでいく努力が求められます。



地域の料理人同士が会える「場」であるゆふいん料理研究会 いまでは若手メンバーの会も誕生しイベント等でも活躍

では「地域」とはどこをさすのでしょうか。もちろんみなさんが日頃住んでいる地域が地域なのですが、人口が減っているこの時代だからこそ、地域を外に開いていくということが大切になってきました。6つの地域のようにふるさとを愛

する住民がいて熱意があつてというのが理想的ですが、松山大学のミューズのメンバーのような、地域の加勢をしてくれる人の居場所があるか、あるいは地域内外の人が交流し出会うことのできる「場」があるかが、これからの地域の要件であると思います。

最後に「来る」ということについて、遊子川のようないい地域だけれどもあまり知られていなかったところが、こうした映画がきっかけで来る人が増えてきたというのは嬉しい好循環です。ただ一回だけ来るといわずでなく、繰り返し来てもらう、あるいは来たらずし長めに滞在してもらうための工夫が、これからの地域の腕の見せどころだと思います。

地域の仲間とさあ旅に出ましょう

愛媛の人と地域が今どこも熱いことや、何を求めて人が地域に来るのかが少しわかってきました。そして最後に一つだけ提案したいと思います。それは地域の仲間と旅に出ましようということです。

たとえば地域で何かを始めれば、新しい関係性もできてきますし、愛南のみなさんがおっしゃるように、活動が認められると自信が生まれ、それが主体的な活動へとつながっていくというプロセスは

とても楽しいものです。ただこうした取り組みというものは、ステップアップすればステップアップしたなりの壁や課題が必ず現れてきます。

また立ち上げの時は心を同じくしていた仲間が徐々に肌離れしたり、ひょんなことから仲たがいでしまふこともよくありますが、そうした時にこそ地域の仲間と旅に出ることに意義があると思うのです。

ではなぜ旅に出るとよいのか、それは頑張っている地域を訪ねて仲間と学んで次に備えるということもありますし、外の空気に触れて、気分をリフレッシュさせながら地域の関係性を繕うということもあるでしょう。でも一番大切なことは、やはり外を見て自分たちの今の立ち位置や自分自身を知ることではないでしょうか。

世の流れは実に速いものです。こうした流れを常に追いかける必要はないものの、でも時代が求めるものと、自分たちができるとの間の間合いを測ることも大切です。

また面白いことに、そうして旅を続けていくと、同じ志を持ったほかの地域の人たちと不思議と出会えるのです。人は一人で生きられないし、地域も地域だけでは生きてゆけない。とすれば、それぞれの地域づくりを頑張るのと同じ比重

で、旅を続けて志のある仲間を求めて、そして地域同士が新しい価値を生み出しながら手を携えて荒波を乗り越えていく、そうした時代を今私たちは迎えようとしているのではないのでしょうか。



由布院ではテーマを決めて場所を探す方法で40年間海外研修旅行を実践 デザインをテーマに視察したスウェーデンのこども向け図書館

(参考文献)

米田誠司

「持続可能な観光まちづくりへの処方箋―由布院」住民と自治(平成26年7月号)

米田誠司

「観光から滞在へ、そして滞在から定住へ」愛媛ジャーナル(平成26年9月号)